

緒言

『枕草子』という作品は何なのか。

これは『枕草子』に本格的に出会った時から抱いている疑問である。「随筆」と称されるが、それではなぜ清少納言は三卷本『枕草子』跋文等にみられるような献上された料紙を用いて、このような形態の作品を残すことにしたのであるか。

「随筆」について秋山虔は『大日本百科全书』の中で、

随筆と称せられる著作は室町時代的一条兼良『東斎随筆』が最初であるが、これは先行の諸書から事実談や伝説を引用し分類したもので、一般にいわれる随筆とは異趣である。随筆とは、形式の制約もなく内容も自然・人事・歴史・社会に関する見聞・批評・思索あるいは研究考証など、多岐にわたって筆の赴くままに書き記した散文の著作であり、筆者の個性や資質、才能の端的な表現ともなる。近世の漢学者・国学者らによって文芸の一分野として盛行したが、近代に入って、ことに大正期以後、西欧に発達したエッセイに対応する文学形態として意識されるに至り、文学史のなかにその系譜がたどられるようになった。

と説明している。また同書で佐藤保は中国における「随筆」を、

中国では、特定の内容や文体にとらわれずに思いのまま筆を運んで書き連ねた文章と著述を、古くは「筆記小説」と総称した。おもに読書の覚書、故事や典故の記録と考証、日常の見聞録など、断片的なメモランダムに類するものが筆記であり、こまごまとした瑣事や民間伝承などを書き留めたのが小説である。文章には一定の内容とそれにふさわしい文体が必要とされた正統的な文学観からすれば、内容・文体とも雑多なそれらの著述は「雑記」「雑

著」ともよばれ、一般に価値は低いものとして軽視された。

筆記小説の類はもっぱら知的興味や単なる好奇心を満たすためのもので、作者の思想や人生観が語られることはまれであるが、気楽なスタイルが人々に愛され、魏・晋のころから流行し、唐代を経て宋代で最盛期を迎えた。随筆を書名とする『容齋随筆』が現れたほか、筆記・筆録、漫筆・漫録、雑識などの名称をもつ多くの著述が生まれた。

としている。たしかに『枕草子』には、様々な内容が作者の表現スタイルによって紡ぎだされていく。それは随想的でもあり、日記回想的でもあり、類聚的な構成の章段が存在する。しかしそれぞれの内容は、やはり大きく異なる。そして、随想的・日記回想的章段は、作者清少納言の生活や中宮定子への思いなどが読者に伝わるのであるが、類聚章段に關して、殊に地名を羅列した章段の存在は謎を持つものでもある。

しかし一方でこの類聚章段群の読み解きこそ、作者清少納言の作品に対する表現スタイルの顕れでもあり、作品内におけるコンテキストである作者の周囲（中関白家・中宮定子周辺）との知的遊戯とそこに秘められているコードを解く鍵となるのではなからうか。

作者清少納言が中宮定子に仕えた時代、そして作品に登場する日記回想的章段の背景は、けして華やかな事ばかりではない。飢饉や疫病の流行。中宮定子の父母の死、兄弟伊周・隆家の左遷。邸宅の火災。家の内外問わず大きな不安が包み込む時代であった。しかしそれらの悲劇を『枕草子』は感じさせない。

その姿勢と記述することに拠ったストラテジーの正体は何であったのか。

本書では、これまであまり注目解明されて来なかった、類聚的章段群の中でも、特に「地名」を中心にした地名類聚章段群を中心に、作者の言語遊戯性とそのコンテキストを読み解くことによって『枕草子』という作品の意図の一端を明らかにすることを試みた。

同時に、その着想と後世への影響についても合わせて私見を提示してみた。

『枕草子』という作品は何なのか。

「家の風」的役割を担うものを作者独自の表現で紡ぎだしたものなのかもしれない。

目次

緒言..... i

第一部 『枕草子』 「地名類聚」 章段 —— 「名」 の選択と配列に見える言語遊戯..... 11

序章 『枕草子』 の本文について..... 13

一 『枕草子』 伝本について..... 13

二 三巻本と本論文底本について..... 15

三 『枕草子』 研究の課題..... 17

四 『枕草子』 類聚的章段と「地名類聚」 章段..... 19

第一章 『枕草子』 「地名類聚」 章段研究の意義..... 25

一 『枕草子』 における「地名類聚」 章段の位置..... 25

二 三巻本「地名類聚」 章段研究の意義..... 26

三 「地名類聚」 章段の特徴..... 29

四 『枕草子』 「地名類聚」 章段における新たな読みの視点..... 34

第二章	「地名類聚章段」と展開——「社は」章段の読み解きから	37
一	方法	37
二	「社は」章段の三つの伝承	37
三	『枕草子』における蟻通明神	44
四	作者の享受態度	48
五	「歌語り」と「打聞」	50
六	おわりに——「社は」章段の言語遊戯性	56
第三章	「池は」章段の読み解き——地名類聚と言語遊戯(一)	61
一	方法	61
二	配列された池とその風土	61
三	「池は」章段における作者の名称選択の意図	69
四	風土からの名称選択	73
五	おわりに——「池は」章段の言語遊戯	75
第四章	「山は」章段の読み解き——地名類聚と言語遊戯(二)	79
一	問題と方法	79
二	「山」の名の配列に隠された言語遊戯	82
三	章段構成から見る作者の〈連想展開意識〉	86

四	「山は」章段の名称の選択と配列の構造	96
第五章 「里は」章段の読み解き——選ばれた地名と配列に見る方法 (一)		
一	問題と方法	103
二	「里」の名の配列に見られる言語遊戯	107
三	「里は」章段の構造	112
四	「里は」章段の読み——「人つま」の表記に対する私論	114
五	名称の選択と配列の意義	119
第六章 「市は」章段の読み解き——選ばれた地名と配列に見る方法 (二)		
一	問題と方法	123
二	登場「市」の推定所在とその背景	126
三	長谷寺参詣と海柘榴市	128
四	「市」の名の選択と配列——言語遊戯から	131
第七章 「地名類聚」章段の本質		
一	方法	139
二	地名類聚章段に見る「ことば遊び」言語遊戯	140
三	三卷本『枕草子』「地名類聚」章段研究の展望と課題	153

第八章	「地名類聚」章段のストラテジー	157
一	はじめに	157
二	日常における言語遊戯	158
三	地名類聚章段プロットのしくみ	160
四	言語遊戯のコード構築の場	166
五	作者の言葉に対する「興味と遊戯」	170
六	「神は」章段に見る「地名類聚」章段の言語遊戯世界	173
七	おわりに	179
第九章	三巻本『枕草子』「地名類聚」章段校訂本文	183
第二部	『枕草子』の基底——言語遊戯に託されたもの	195
第一章	「枕草子」は何のために書かれたのか	197
一	——女房の「知識・知識・機知」そして「教育」に連関して	197
二	はじめに	197
二	作者・読み手間の共通認識——言語遊戯のコード構築の場	198

三	当時の「教育の目的」	202
四	『枕草子』における「教育」の素材	205
五	作者の「宮仕え」と「女性」論	214
六	女房という存在と役割	217
七	『枕草子』に見る「教育観」の基底	219
八	作者の役割	220
九	おわりに	224
第二章	「春はあけぼの」章段の謎	227
一	はじめに	227
二	作品構成からの「春はあけぼの」章段	228
三	「春」と「あけぼの」の表裏——時間推移	234
四	「春」と「あけぼの」の表裏——紫立ちたる雲	239
五	言語遊戯と機知	241
六	おわりに	243
第三章	「舞は」章段のしくみ	247
一	はじめに	247
二	列挙された「舞」の特色	250

三	『枕草子』における「舞」の表現	253
四	列挙された「舞」への仮託	257
五	おわりに	262

第四章	「社は」章段のしくみ	265
-----	------------	-----

一	はじめに	265
二	「社は」章段の構造	266
三	三卷本『枕草子』「地名類聚」章段研究の展望と課題	271

第五章	「関は」章段のしくみ	275
-----	------------	-----

一	はじめに	275
二	選ばれた「関」の名が持つ謎	275
三	列挙された「関」の背景	278
四	「逢坂の関」に対する作者の概念	285
五	「関は」章段の言語遊戯	287
六	おわりに	291

第六章	『枕草子』日記回想章段の読み説き	293
――	『枕草子』「大進生昌が家に」章段のストラテジー「作者の意図」伏線として	293

一	はじめに	293
二	コンテキスト	295
三	門への拘り	302
四	生昌兄の唐突な登場	303
五	おわりに	305

第七章 『枕草子』 日記回想章段の読み説き

一	はじめに	307
二	日記回想的章段の諸問題及び作者の意図した虚構	307
三	「故殿の御服のころ」 章段の問題点	309
四	「故殿の御服のころ」 章段のプロット	313
五	「故殿の御服のころ」 章段構造	315
六	おわりに	317

第三部 『枕草子』の前と後

第一章	紀貫之と仮名文文学——女房文学の視点から	321
一	はじめに	321

二	『枕草子』『源氏物語』に描かれる貫之	324
三	女房文学の場	330
四	「語り」と貫之	332
五	おわりに	335
第二章	『土左日記』一月七日の記事をめぐって	339
一	はじめに	339
二	歌物語的構造	341
三	言語遊戯	344
四	歌論志向	345
五	おわりに	347
第三章	『土左日記』一月九日の記事をめぐって	351
一	はじめに	351
二	一月九日	353
三	表現の対称性	355
四	登場歌の役割とテキスト構成における言語遊戯	357
五	記事の裏面	361
六	おわりに	363

第四章	地名・場が担うもの——『大鏡』語りの場としての雲林院	365
一	はじめに	365
二	『大鏡』の作品プロット	365
三	「雲林院」の風土	367
一	離宮と寺院	367
二	体制と非体制	372
三	文学の生成・享受の土壌	377
四	作品成立期のコンテクスト	379
五	おわりに	380
第五章	地名・場に受け継がれたもの——「明石」の回帰性	383
一	はじめに	383
二	畿内と外	383
三	須磨と明石	385
四	明石と住吉の神	389
五	おわりに	391

第六章 地名・言語遊戯の伝承と享受

——狂言と平安朝文学「業平餅」に見る『伊勢物語』の享受

- 一 はじめに——「狂言」と文学……………393
- 二 狂言における平安文学の享受のあり方——間狂言……………394
- 三 狂言における在原業平と『伊勢物語』享受……………407
- 四 狂言における模倣性と言語遊戯……………410
- 五 おわりに——狂言と「文学」……………412

第七章 文藝の可能性言語遊戯・言語表現に見る歌謡のストラテジー

- 一 プロローグ狂言の特質……………415
- 二 狂言に見られる詩歌……………418
- 三 詩歌と狂言直接的享受……………420
- 四 詩歌と狂言間接的享受……………423
- 五 エピローグ提言に代えて——歌謡のストラテジー「文藝の可能性」……………425

〈初出一覧〉

結語にかえて——附祝言……………435

索引……………439